

RCE 冊子フォーマット

RCE 岡山

記入者名 流尾 正亮

(1) ESD 推進の対象団体 (項目別に①～③) にチェックを入れてください。

① 事務局 (岡山 ESD 推進協議会/岡山市 ESD 最終年会合準備室内)

② 現状つながりの強い団体

- | | | |
|--|--|---|
| <input checked="" type="checkbox"/> 学校 (小・中学校) | <input type="checkbox"/> 高等学校 | <input checked="" type="checkbox"/> 大学・専門学校 |
| <input checked="" type="checkbox"/> 市民団体 | <input checked="" type="checkbox"/> 行政 | <input type="checkbox"/> 企業 |
| <input type="checkbox"/> その他 | | |

③ 今後つながりを強化していく予定の団体

- | | | |
|--|--|---|
| <input checked="" type="checkbox"/> 学校 (小・中学校) | <input checked="" type="checkbox"/> 高等学校 | <input checked="" type="checkbox"/> 大学・専門学校 |
| <input checked="" type="checkbox"/> 市民団体 | <input checked="" type="checkbox"/> 行政 | <input checked="" type="checkbox"/> 企業 |
| <input type="checkbox"/> その他 | | |

(2) 以下、記述ください。

1. ESD 事業における主な目的、目指すものについて。ESD をどうとらえているか。

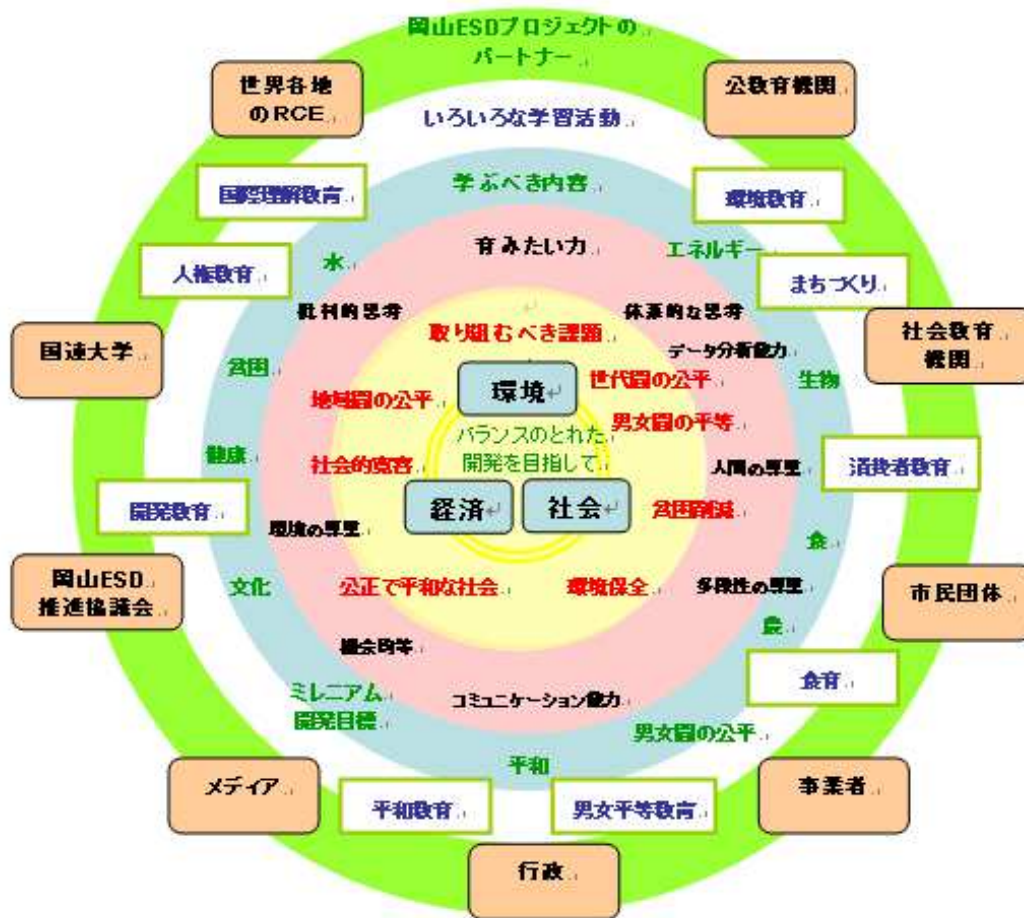
岡山地域において、ESD に関する様々な取り組みを行っている関係機関や組織等の連携を強化して、岡山地域の特性に応じた効果的な ESD を推進することにより、「持続可能な社会づくり」に幅広く広域的に貢献していく活動として、岡山 ESD プロジェクトを推進しています。

本プロジェクトにおいては「持続可能な社会の実現に向け、共に学び、考え、行動する人が集う地域づくり」を目的とし、それを実現するための目標を次のとおり設定しています。

(1) 国連大学が示す RCE の考え方や、国際実施計画、国内実施計画に基づいて ESD に取り組むとともに、岡山地域の ESD 関連各組織・団体間等の活動の状況を把握し、連携の強化や、活動レベルの向上等により、現在の岡山地域における ESD の課題を明らかにした上でその解決を図り、地域の特性に応じた ESD を推進すること。

(2) 岡山地域に暮らし活動するすべての人々の SD に関する理解や知識が深まることにより、地域内で自主的・積極的に持続可能な社会づくりに取り組む組織や人の輪を広げていくこと。

(3) 岡山地域外で ESD に取り組む人たちとの交流・連携・情報発信を図り、UNDES D の推進に貢献していくこと。



また、これをふまえて、当面のプロジェクトの数値目標を次のとおり設定しています。

- (1) 全小学校区で、最低年1回以上のESDが実施されていること。
- (2) 地域全体で、150以上の組織が岡山ESDプロジェクトに参加している。
- (3) 中学校区等の地域単位の多様な組織が連携して行うESDプロジェクトが4以上ある。
- (4) 持続可能な社会づくりに関する活動に、自主的、積極的に取り組む人の数を、この事業の対象地域の人口の10%以上を確保すること。

て検討する。

また、協議会会長の指示に基づき、必要に応じて運営委員会内に部会を設けて、このプログラムの推進方針について検討し、その結果を委員会に報告する。

C. 事務局

岡山市 ESD 最終年合準備室に設置し、委員会の決定や運営委員会の検討結果に基づき、上記(イ)～(オ)の事項等に関する具体的な協議会活動を行う。また、委員会及び運営委員会の会議運営等を行う。

<重点取組組織>

岡山地域で ESD 活動に取り組む組織の中で、岡山 ESD プロジェクトの趣旨に賛同して、研修や情報交換、取組成果の提供等を行う組織を重点取組組織として協議会が指定します。

また、指定の対象は、原則として、ESD に取り組む組織全体を指定することとするが、組織自体が大きい場合などには、必要に応じて、個別の活動単位で指定します。

重点取組組織の中で、財政的な基盤が極めて弱い組織については、協議会が、その活動経費の一部を助成します。

<中核組織>

重点取組組織をはじめ地域内で行われる様々な ESD 活動を支援するため、指導者の育成や異なる組織間の連携・交流のコーディネート、地域全体の ESD 活動に関する情報発信等の特定の機能等に関して、地域全体の ESD 推進の中核機能を有する組織を中核組織とします。

<中間支援組織>

重点取組組織をはじめ、地域で様々な ESD 活動に取り組む組織等を支援する機能を有しており、プロジェクト全体の推進に貢献する組織を中間支援組織とします。

<岡山 ESD ネットワーク>

岡山 ESD プロジェクトを推進するため、上記のプロジェクト推進組織、このプロジェクトに賛同して自ら活動する機関、及びこのプロジェクトを支援する機関等で「岡山 ESD ネットワーク」(以下「ネットワーク」)を構築します。

3. 協議会等、推進体制における、活動内容・成果について。

岡山 ESD プロジェクトとして活動を行っている重点取組組織等では、地域的広がりとともに、下記のとおり、活動内容が深まっている事例や、単独で取り組む活動だけでなく、複数の組織同士がつながり、連携する事例が増えてきています。

- (1) 基本構想のプロジェクト目標である「中学校区単位の多様な組織が連携して行う ESD 活動」が目標値 4 に対して 8 を達成した。
- (2) 活動分野としては、国際的な課題や東日本大震災の被災地とのつながりから学ぶ活動や、子育て世代の親子のコミュニケーション力や思いやりを育むことをとおして持続可能な社会づくりについて学ぶ活動など、新たな分野・ジャンルにおける取り組みが進められた。
- (3) 交流・ネットワークづくりにおいては、ESD カフェやダイアログカフェ等の実施により、活動を行う人々の対話の場を提供した。特に、ESD カフェでは「大学と社会をつなぐ」ことや、「被災地支援を行った学生ボランティアの経験から学びあう」等、大学生をはじめとする若い世代が対象となるテーマを設定し、テーマに沿った対象者への参加を促すことにより、若い世代の参加者が増加した。
- (4) 本年度から始まったユネスコスクール活動の支援においては、学校の様々な取り組みを ESD の視点からあらためて捉えなおし、地域の多様な人々とつながり、活動することを通して関係構築や地域づくりを進めている取り組みが見られた。

< ESD カフェ >



< ユネスコスクール ESD 活動・第三藤田小学校 >



また、RCE 関連国際会議や国内 RCE 連携のプロジェクトなどを通じて国内外の地域・組織との相互交流や情報交換を促進しています。

2011 年 8 月には、宮城県仙台市から小学 6 年生約 30 名を岡山市へ招待し、岡山市北区建部町の小学生と協同で「未来への絵手紙」の絵画作成や、水辺の教室で一緒に魚捕りをするなど交流を進めました。

<仙台・岡山 ESD 子ども交流事業>



<RCE 実務者会議 2012>



これらの活動とあわせて、岡山県内をはじめ、瀬戸内海を挟んだ香川県の自治体や幅広い組織とともに「国連 ESD の 10 年」最終年會合の誘致を進め、最終年會合における各種ステークホルダー會合の岡山開催を実現することができました。

4. 主な参加組織、団体の活動内容・成果について。

①参加組織・団体名[NPO 法人ハート・オブ・ゴールド]

<活動内容・成果>

1. 活動内容

ハートオブゴールドは、カンボジア政府や JICA、現地 NGO なども協力して全国的な保健体育の推進や日本語学校の設立運営などを行っている NGO です。日本国内においても、カンボジアからの留学生および体育教員の研修受入れや、彼らを通じた国際理解教育を小・中・高校、大学で行っています。

東日本大震災で被災した東松島市・石巻市の小学校への支援の実施や、岡山市内の小学校との交流の促進・支援を行いました。

2. ESDの視点を取り入れたところ

総合的なものの見方を養うこと。単に途上国に支援するというのではなく、資源・経済・環境など地球規模で問題を捉えなおし、また、東日本大震災への支援・復興についても、持続可能な社会づくりを視野に入れることを認識して活動を行いました。



3. 成果

活動を通して、自分たちの思い・考えが相手に伝わり、遠いと思っていた人たちが近くに感じられるようになり、顔の見える協力・交流につながりました。

カンボジア人や、現地に入った人から、直接海外で活動したことを聞くことで、国際協力が身近に感じられるようになりました。

自分たちなりに出来る活動があり、将来社会に役立てる人間になるという決意を感じる事が出来ました。見えないものを見る目、聞こえない声を聞く耳を持ち、まずは実行する手と足を使って、相手の立場に立って考えられる冷静な頭脳と温かい心を育むことを目指して活動を進めることができました。

4. 今後に向けた課題と展望

指導要領の改訂によって、総合的な学習やゆとりの時間が少なくなり、これまでのような活動に対する時間が十分に取れなくなっているが、子どもたちが主体的になって実施したいと感じている被災地支援等について長期的な視野を持って継続的に支援・実施していきたい。

今後も持続可能な社会づくりに向けて、具体的な実践を提言していきたい。

②参加組織・団体名[竹枝を思う会]

<活動内容・成果>

1. 活動内容

岡山市北区建部町の市立竹枝小学校は児童数わずか30人ほどの小規模校です。

児童数減少を食い止めるため、ふるさとを愛し、いつかふるさとに帰ってくる人を育てようと平成18年に小学校と竹枝地区の住民有志とで「竹枝を思う会」が結成され、ふるさとのよさを伝えていく協働事業や、学校支援ボランティアの実施とあわせて、荒れていた旭川の河川敷を整備して水辺での遊びを復活させました。

毎月1回、「たけえだ水辺の楽校」として、河原キャンプや自然の宝探し、アユ漁体験、ホタル狩り、裏山探検などを行っています。

また、「旭川かいぼり調査」として、川をせき止めて干上がった川の魚を拾って、その数で川の健康状態を調べるものです。地域の人や漁協だけでなく、行政や岡山理科大学などの協力を得て実施しています。

<かいぼり調査>



<ふるさとづくり発表会>



2. ESDの視点を取り入れたところ

持続可能なふるさとづくりを目的として、学校と地域の生き残りとして「竹枝を思う会」の活動を行っています。地元住民が思いと目標を共有し、地域ぐるみの取組みが不可欠と考え、定期発行している「竹枝っ子通信」の回覧や、移住促進への協力依頼チラシの配布、ふるさとづくりワークショップの開催と参加呼びかけなど、タイムリーな情報提供と熟議の場づくりに意識的に取り組んでいます。

3. 成果

実施している行事を地域内だけでなく、オープンにしたことで参加者も増え、交流の輪が広がってきています。ふるさとづくりワークショップを実施することによって、今年度の成果と課題を整理し、今後の活動の方向性を確認し合いました。また、これまでの取組みを「たけえだ・生きものの里・未来構想」にまとめました。

これまで活動を応援してくれた地域外の個人・団体との関係が継続でき、次の活動につながっています。

竹枝に住みたい、竹枝小学校に通わせたい、という、移住・定住を希望する家族が増えたため、平

成 24 年度には小学校児童数が 25 名から 32 名に増加し (28%増)、1・2 年生の複式学級が解消され未来への展望が開けてきました。

4. 今後の課題と展望

今後も地道に成果を積み上げ、竹枝の魅力を発信し、学校と地域の価値を高めることで、「田舎で子育てするなら竹枝が一番」を目指します。

竹枝地域において減少の一途をたどっている子どもの数を増やし、コミュニティの拠点である竹枝小学校の存続を目指しています。

移住・定住した家族に「竹枝にきてよかった、竹枝小学校に通わせてよかった」と言われるように、また、地元住民から「来てくれてよかった」と言われるように、様々な調整・交流サポートを続けています。

③参加組織・団体名[京山 ESD 推進協議会・岡山市立京山公民館]

<活動内容・成果>

1. 活動内容

岡山市京山地区では、京山公民館を拠点に 2003 年度から ESD 活動を行っています。京山地区の ESD 活動は、地域の小中学校の子どもたちが公民館に集まり、地域の川や空気の汚れを調べて地域の人に報告することから始まりました。現在では、さまざまな催しを通して、学校での環境教育、地域に多く住む外国人との共生など、多様な広がりを見せています。地域の歴史が現在に至る経緯をたどる映画づくりをとおして、長年途絶えていた祭りの復活も行っています。

平成 23 年度には、6 月と 10 月に「環境てんけん」を行い、大気調査、植物調査のほか専門家による講義も行われ、小中学生、社会人、地域住民、市民団体、行政などから 50 名以上が参加しました。

7 月、1 月には、「源流体験エコツアー」として、旭川の上流域にある新庄村へのバスツアーを実施しました。ブナ林の中での森の学習、昆虫・自然観察や大気調査等を行い、旭川源流域の水辺を体験。

1 月には、京山地区の年間活動のまとめとして、「ESD サミット」を開催。京山中学校科学部の生徒たちから「環境てんけん」の結果発表、小学校の取り組み紹介などを行い、活動に参加していなかった地域の人たちにも取り組みと成果を共有し、今後に向けての意見交換などを行いました。

2. ESD の視点を取り入れたところ

ESD の視点としては、大きくは継続的に学社連携・全世代合同で地域の環境てんけんを行うことで、持続性を損なっている地域課題や変化に気づき、持続性向上や保全に主体的に取り組む市民を育てようとしています。

広い視野に立ち、流域というつながりの中で、地区外の源流域で日常にはない自然体験や生活体験ならびに上下流交流を通して、つながりを意識し、原体験やコミュニケーション能力（「生きる力」）などを育むという点を重視して活動しています。

今回は、体験で得られた事実を専門家の協力を得て掘り下げて学び合うことで、その背景にある論理的な説明やつながりが理解（「見える化」）でき、より良いものにすることを意識し、何をどうしたら良いかを「参加者自身が自分ごととして行動できる力」を育む点に力を入れています。このために、各活動に大学教授や行政の専門官等にゲスト講師として加わっていただき、論理的な説明やつながりの見える化に努めています。

3. 取り組みの成果

参加者の多くが、この活動を通して、社会のつながり、自分との関わりがわかり（「見える化」）、地域の中のいろいろな世代の人と学び合うことができています。

地域の一員としての実感がもて、地域に愛着がもてるようになったことで、地域の問題を自分ごとととらえ、自分だけでなく地域のみんと共に一緒に取り組んでいこうという意識ができてきたと考えられます。

参加した子どもがふりかえりシートに「滝遊び、川遊び、山登り、環境調査など、ふだんできないことができた。」と書いてくれましたが、こうした新鮮な体験の中で多くの気づきと感動を得ることで、意識と行動の変容につながった参加者が多くなっています。

また、夏と冬の源流体験エコツアーなどは、環境だけに特化せず、社会や経済にも通じる文化面にも留意して行い、とんどや餅つき、さまざまな遊び体験などを通して、地域固有の伝統文化、固有の環境の中で培われてきた暮らしの知恵などを教わりました。それらをとおして暮らしや社会と環境とのつながりを客観的視点で考えることができ、視野が狭くなりやすい自分の身のまわりの日常的生活空間における暮らしや社会と環境とのつながりを捉え直すきっかけになった様子が見られました。

4. 今後の展望と課題

持続可能な社会づくりには、社会全体の有り様（習慣）を持続可能なものへと変容させていかなければなりません。その原点は一人ひとりの意識と行動の変容にあることを考えれば、この一連の取り組みの参加者の変容が、社会全体の変容に波及していく原動力になると考えられます。

今後も地道に今の取り組みを広げていって、社会全体が持続可能な方向へ向かうように、子どもから大人まで、地域住民みんなの意識と行動の変容が進むように、E S Dの取り組みを進めていくこととしています。

また、今の取り組みは実践者の視点から進めてきたもので、今後は教育学的な視点から取り組み全体を見直し、この取り組みを「教育」の視点でより発展させていきたいと考えています。今は漠然としている評価の視点（目標）も明確にしていくことを目指しています。

学びから実践する持続可能な地域づくりへと、より一層地域づくり、人づくりに取り組んでいこうとしています。

5. RCE の強み・特長。主な成功要因について

- (1) 多種多様な団体や人が ESD に関わる「場」があります。
 - 「つながる機会」⇒「対話」⇒「学び合い」が生まれた。
 - 「ゆるやかな」ネットワーク・・・多様な団体が自由に学び合える。
 - ESD に取り組む団体・市民が増加し、エリア的な広がりが見られる。

- (2) 行政が主体的・継続的に ESD 推進に取り組んでいます。
 - 行政が主体的に ESD を推進することで、行政の持つ強みを活用することができる。(安定性・組織力・既存のネットワーク・信用)
 - 行政が入ることで、ESD が地域社会全体の公共的施策（新しい公共）として地域の人々に認識された。⇒ESD が受け入れられやすい。

- (3) ESD 専従コーディネーターによる継続したサポートが安心感を生んでいます。
 - 専従コーディネーターによる継続したサポート
⇒関係者との間の信頼関係と協力的なネットワークづくり
⇒多様な団体を結びつけることができた。

- (4) 公民館による地域での ESD 推進を行っています。
 - 公民館が地域住民に ESD を学ぶ場を提供している。
 - 公民館職員がコーディネーターとして NPO、市民の活動、地縁組織を結びつけている。
 - 公民館が社会教育機関として再認識された。
 - 地域住民がすでに行っている活動を ESD の視点から意味づけができた。

- (5) 地域が主役となり、大学は専門性を活かした支援をしています。
 - 大学が地域の ESD 活動に協力し、連携・支援を行っている。
 - 大学が持つ専門的視点を活用することで、地域の人々だけでは得られなかった「気づき」があり、地域の魅力の再発見につながっている。

6. RCE、ESD 推進における課題について。

今後、地域全体において効果的に ESD を推進していくためには、次の事項に取り組む必要があります。

- (1) 岡山ESDプロジェクトに参加している団体の中で、より多くの連携プロジェクトが実施され、多様な学びが一層促進されるよう、コーディネートしていくこと。
- (2) 国際的な課題に取り組む活動団体の数、活動の内容が限られていることから、様々な団体との連携を拡大し、国際的な課題解決に向けて、共に学んでいくこと。
- (3) ESD プロジェクトの活動において少数派である若い世代に対して、より一層活動への参加を促していくこと。
- (4) 市民や学生等がより主体性を持って「参画」できるようなしかけや仕組みづくりを行うこと。
- (5) 2014 年の最終年會合に向けて、国内外の RCE やユネスコスクールをはじめとした関係組織との連携をさらに深めるとともに、岡山地域内での広報・啓発を強化し、ESD についての関心を高め、ESD 活動への参加を促していくこと。
- (6) 地域課題に取り組むため、地域の核となる人材（キーパーソン）を育成すること。
- (7) 公民館職員が、ESD に関する知識をより深めると同時に、公民館職員間の知識・スキルの差異を小さくする。
- (8) 専従コーディネーター（協議会事務局）と地域のコーディネーター（公民館の社会教育主事等）との連携・協働の仕組みづくりを行っていくこと。また、コーディネーター育成の仕組みづくりを実施すること。
- (9) 地域課題に応えるために、環境・教育分野以外にも、経済・福祉・工学等の幅広い分野における連携・支援を広げていくこと。

7. 2014 年に向けた、およびポスト 2014 年展望について。

2014 年及び 2014 年以降に向けては、以下の事項に取り組んでいく必要があります。

- (1) ゆるやかなネットワークを保ちながら、活動する団体を増やしていく。
- (2) 行政が継続して事務局運営を行いつつ、課題への対応を進めていく。
- (3) ESD コーディネーターに必要な資質・能力を分析し、コーディネーター育成のシステムを構築する。
- (4) 公民館を活用し、地域住民自身が地域課題に取り組み続け、さらにグローバルな課題と結びつけていく。
- (5) 大学等の高等教育機関が、ESD のより多くの分野へ参画し、地域と結びつくように、コーディネートする。
- (6) ESD 活動が「持続可能な未来づくり」のための人づくりとなっているかについて、成果を図るための指標を設定し、検証方法を確立し、分析・解析していく。

8. RCE とユネスコスクールとの連携事業について。

岡山市教育委員会が中心となって、2014 年までに 50 校の加盟を目標に、ユネスコスクールの推進を行っています。

岡山市域では、ESD 推進の拠点となる公民館（社会教育）とあわせて学校においてユネスコスクールへの加盟を促進し、RCE 岡山として、岡山市・岡山 ESD 推進協議会が中心となって ESD の推進を支援しています。

平成 24 年度には、小中学校あわせて 14 校が認定されました。

<第二藤田小学校 地元農家へ訪問>



<小串小学校 つぼ網体験>

